

# 夢とロマンの行動派研究者～小野先生

東京大学生産技術研究所 助教授 岡部 徹

小野先生と私の出会いは、1987 年の春、私が大学四回生のときである。当時、私は大学の熊野寮に住んでいたため寮における交友関係で忙しく、ほとんどの講義をサボり学外で遊び呆けていた。授業の登録だけでなく研究室への配属も友人に一任していたため、研究室配属が決まった時も小野教授のお顔とお名前が一致せず、何の研究をしている研究室かさえも知らなかった。

人との出会いとは不思議なもので、小野先生からチタン製錬に関する研究を卒業研究のテーマとして与えられたのを契機に私の人生は大きく変わった。最終学年になっても語学の単位の大半を残し、卒業もおぼつかない私であったが、結局のところドクターコースまで進学する機会を与えて下さったのは小野先生である。熊野寮での学部生活は刺激に富み勉強以外のことで充実していたため、当初は研究にあまり興味を覚えなかった。しかし、小さいことは気にされず、お酒を好まれ、チャレンジ精神に富む小野先生のご薫陶を受けるうちに、研究の奥の深さと実験の面白さを教えられた。

小野研時代、実験装置を工夫して自作する楽しさも学んだ。私が愛用していた実験装置から無断で誰かにパーツが持ち去られることがよくあった。私が研究室の掲示板に「岡部の〇〇を無断で取ったのは誰だ?! 名乗り出よ!」と怒りをこめて殴り書きすると、すぐに「すまん。小野」と書かれることが多かった。慌てて掲示板のコメントを消した日々が今は懐かしい。当時の私は他の研究室を知らなかったため、教授自らが実験を行うのは当然のことだと思っていた。それで、大事な実験装置のパーツを教授に持って行かれないように常に目を光らせていたのである。今から思えば、指導教授と共に汗を流し、実験の失敗の悔しさや成功の喜びを共有できたのはかけがえのない貴重な体験であった。

酒好きの私は、下宿で「ワインパーティー」をはじめ各種飲み会を企画したが、研究室の掲示板の出席希望者リストに真っ先に名前を連ねるのも小野先生であった。学生の下宿に上がりこんで、一緒に酒を飲んでも若手が楽しむことができたのは、小野先生の温厚なお人柄あってのことである。決して表には出されないが行き届いた気配りをされる教授のおかげで、六年間、実に楽しく充実した研究生活を過ごすことができた。研究テーマの選定を含め、あらゆることに対して私の好き勝手に研究をさせて

頂けたことに対しても感謝の念を禁じえない。

私は京大で学位取得後、MIT、東北大、東大と転々としているが、何処に行っても小野研で手掛けたチタンをはじめとするレアメタルの研究を続けている。また自らの手で装置を作り工夫を凝らして実験を行う小野先生流の研究スタンスも変えていない。最近では、チタン研究だけでは研究予算の確保が難しく、電子材料の開発や環境科学に関する研究などにも手を広げているが、小野先生より受け継いだプロセス研究に対する「夢とロマン」は、持ち続けているつもりである。私が先生より受けた素晴らしい現場教育を今の学生に伝え発展させることが、小野先生に対するささやかなご恩返しになろうかと思っている。

---

（『夢とロマンの行動派研究者～小野先生』岡部 徹：水曜会誌（京都大学資源・金属系関係学科） vol.23, no.4 (2001) pp.386-386. より転載）